

公益財団法人 檉の芽会 御中

令和 7 年度伴走型就学・学習支援活動助成 実施報告書

【団体の概要】		① 作成日	令和 8 年 5 月 1 5 日
②法人・団体名	特定非営利活動法人 勇者の会		
③団体所在地 (都道府県・市町村名まで)	北海道札幌市		
④責任者氏名	阿部 美幸	(役職名等)	代表理事
⑤担当者氏名	嶺 正子	(役職名等)	副代表理事

【奨学活動の概要】					
⑥助成交付決定番号	R07-024	⑦助成金額	100 万円	⑧申請カテゴリー	D
⑨奨学活動名	闘病により遅れた勉強と心のサポート支援事業				
⑩主な実施場所名・ 及びその住所	NPO 法人勇者の会の「絆 at home」 北海道札幌市中央区南 4 条西 10 丁目 1004-5 スカイコーポラス 1F				

⑪活動内容とその成果の概要（詳細は【様式 3 - 2】又は別添資料にて記載・説明ください。）

小児がんなどで闘病中の高校生に対する学習支援を実施しました。今回は、中学生から継続支援を行っている高校 3 年生 2 名を対象に、卒業および進学に向け、一人ひとりの体調や状況に応じた支援を行いました。

支援に必要な学習資料の印刷用紙・インク、郵送用レターパックを活用し、継続的な学習環境を整備しました。体調変化や再入院による学習の遅れもありましたが、少人数支援を活かした柔軟な対応により、卒業・進学に向けた支援を継続することができました。

⑫奨学活動の定量的把握（注：統計情報として参考まで把握するものです。活動成果等は上段⑪及び様式 3 - 2 等でご報告願います。）

支援対象	延べ人数 (A : 人)	平均時間 (B : 時間)	活動量 (A x B)	備考・補足・計算根拠等
中学生等				
高校生等	209	2.411	504	(2 人 x 3 回/週 x 4 週/月 x 8 ヶ月 + 17 時間) x 2.411 時間
大学生等				
学習支援員等	209	2.411	504	(3 人 x 2 回/週 x 4 週/月 x 8 ヶ月 + 17 時間) x 2.411 時間
その他	144	2	288	1 人 x 4 回/週 x 4 週/月 x 9 ヶ月 x 2 時間
合 計				

⑬その他の定量的な数値（任意）

令和 7 年度伴走型就学・学習支援活動助成 実施詳細報告書

奨学活動名：闘病により遅れた勉強と心のサポート支援事業

法人・団体名：特定非営利活動法人 勇者の会

作成者 氏名：阿部 美幸・嶺 正子

1. 取り組んだ課題や実践した目的・実施内容について

小児がんなどで闘病している中高生は、治療の副作用による体調の変化や長期入院の影響で、思うように勉強を続けることが難しい状況にあります。

また、学習環境が十分に整っていない場合もあり、授業の遅れや受験への不安を抱える生徒も少なくありません。

その為、学習面の支援だけではなく、子どもたちの不安に寄り添う心のサポートも大切です。私たちは体調を見ながら、本人や家族、学校の間に入りながら調整を行い、体調に配慮しながら遅れた学習サポートを行ってきました。

2. 実施した奨学活動の詳細

○活動内容

子どもたちの体調を見ながら学習を進め、苦手な教科は一緒に取り組みながら理解を深めています。理解が難しい場合には、中学生であっても小学生の基礎内容まで戻り、一人ひとりのペースに合わせて基礎からサポートを行っています。

○参加人数

2 名

○周知方法や協力いただいた関係者

中学生の頃から継続して支援している生徒が 2 名おり、対応可能な講師陣も 3 名と限られていた為、周知方法としては、口コミを中心としました。北海道大学病院・旭川医科大学病院・北海道難病連の皆様

○地域やボランティア活動との連携

心に傷を抱えたり、つらい経験をしてきた子どもたちを支援するには、誰でもよいと言うわけではありません。

私たちの会では、一人の生徒に対して三人体制でサポートを行っています。

一人は、生徒と同じ年代でガンを経験した方や現役の医大生など、子どもたちに近い立場のスタッフです。

一人は、現役の高校教師や塾講師、元教師のシニアボランティアなど、学習面を支えるスタッフです。

一人は、ガンの子どもの持った親である代表理事が、子どもたちの心の面をサポートしています。

○学習支援員について

勉強を教える中で、子どもたちは抗がん剤治療のつらさに加え、「義務教育だから勉強をしなければならない。」というプレッシャーも抱えています。長期的に支援を続けていると、「私の気持ちは誰にもわからない。」といった言葉が出ることも少なくありません。

そんな時、同じ年代でガンを経験した学習支援員が「つらい気持ちはわかる。でも、それでもやらなければならないことはあるよ。」と声を掛ける事で、子どもたちが少しずつ気持ちを受け止め、前向きに学習に向き合えることがあります。

同じ経験をした立場だからこそ、子どもたちの心に寄り添いながら支えられることが、学習支援員の大切な役割だと感じています。

3. 本活動から得られたもの、反省点、課題、今後への発展性、等

○得られたもの

長期的に関わることで、一人ひとりの学習理解度や苦手分野、学習スタイルを把握することができ、それぞれに合った指導方法の確立につながりました。

また、生徒と講師の相性や指導のタイミングを丁寧に調整することで、生徒それぞれが希望する専門学校や卒業が出来ました。

○反省点

中高生を中心とした支援を想定していましたが、実際には小学生や幼児への対応に多くの時間を要しました。加えて、受験を控えた高校生への個別対応や、入退院に伴う学校との調整に時間がかかり、人員体制の拡充まで至らなかった点がありました。

○課題

維持療法中の子どもたちへの支援は、体調の変化により予定通りに進まないことが多く、学習時間に体調を崩したて再入院となるケースやテスト期間であってもテストに参加できない状況があるなど、患者家族と支援団体双方にとって大きな負担となっていました。

今後は、こうした状況に対し、行政・病院・学校がより連携し、柔軟にフォローできる体制の整備が求められることが課題であると考えております。

4. 本活動におけるエピソード、思い、感想、等（任意）

○エピソード

長期支援の中で、子どもたちの自我の成長によりスタッフとぶつかる場面も見られましたが、小児がん経験者のスタッフとの関りを通して、「やらなければならない。」「逃げてはいられない。」という前向きな気持ちが芽生えていきました。

その結果、「将来ボランティアとして戻りたい。」「医者になりたい。」といった目標を持つ子どもたちも現れました。

また、本活動に関わった大学生スタッフが医師へと変わった例もあり、支援の広がりや意義を強く感じました。

5. 学識者からのご意見、コメント、等（申請カテゴリにて「S」が付されている団体）